

3つの概念を身につけることを通じて、 論理的に文章を読み書きする力を育む

青森県立青森中央高校 笠井敦司

かさい・あつし ● 同校に赴任して3年目。総合学科推進部部长。国語科。

大学入試問題などを研究する中で、どのような問題も「対比」「類比」「因果」の概念をつかめば対応できるという考えに至った笠井敦司先生。それら3つの概念を生徒が身につけ、自在に使うことができるよう、授業に工夫を凝らしている。



学校概要

設立 1904 (明治 37) 年 形態 全日制/総合学科/共学 生徒数 1学年約 160 人

2024 年度卒業生進路実績 国公立大は、青森県立保健大、青森公立大に 9 人が合格。私立大は、札幌学院大、北海道医療大、青森大、青森中央学院大、八戸工業大、弘前医療福祉大、弘前学院大、東北学院大、国士館大、日本大、東海大などに延べ 58 人が合格。短大・専門学校進学 78 人。就職 25 人。

私が考える中核的な概念

評論や小説、古文、漢文のいずれにも 通底する「対比」「類比」「因果」

大学入試問題の研究の過程で見いだした3つの概念

私は、国語の中核的な概念は「対比」「類比」「因果」だと考えています。それら3つを、国語が扱う「論理的な文章」「実用的な文章」「文学的な文章」「古文」「漢文」のそれぞれの特性にあてはめて具体化しました(図1)。

◎対比 「Aは○○であるのに対し、Bは□□である」と、対立する概念を並べたもの。論理的な文章であれば、筆者の主張に対立する主張を並べることで、筆者の主張を際立たせる。

◎類比 筆者が伝えたいことと似ていることを並べたもの。複数の事項に通ずる性質を抽象化すると、一般化する。

◎因果 事象の原因と結果。過去の事象だけでなく、未来の事象に対しても、「もしAだったら、Bになる」と、条件と帰結としてあてはまる。

それら3つの概念は、大学入試や模





擬試験の問題分析を通じて見いだしました。「この選択式問題は主張と対比される選択肢を選ぶ」「この要約の問題は共通性を見いだして抽象化する力が問われている」というように、問題を解く鍵となることを分析したところ、通底するものがいくつかあることに気づきました。そしてそれらはできるだけ簡潔に示す方が生徒も理解しやすいと考え、3つに集約して表現するとともに、文章の種類に応じた下位概念を設定したのです。

中核的な概念は、例えるなら「数珠のひも」です。数珠は、一つひとつの玉の真ん中に「ひも」を通して玉同士をつなげることで機能します。それと同じように、単語の羅列では他者に論理的に伝わる文章にはならず、「対比」「類比」「因果」という「ひも」によって単語がつながることで、論理的な文章になるのです。

また、単語は文脈によって意味が変わります。例えば、「対比」で書かれ

図1 笠井先生が考える中核的な概念と、各種文章との関係

中核的な概念「対比」「類比」「因果」

	 論理的な文章	 実用的な文章	 文学的な文章	 古文	 漢文
対比	違い・変化	差・割合	葛藤・対立	葛藤・対立	自説―他説
類比	共通性・一般化	共通点	比喩・象徴	比喩・象徴	故事―現状
因果	原因―結果	主張―論拠	心情―行動	心情―行動	条件―帰結

※学校資料を基に編集部で作成。 * 物語・説話 * 論説的文章

ている文章だから、この単語はよく使われるAの意味ではなく、Bの意味になる」といったことです。単語を文脈に応じて適切に解釈する・使う上でも、文脈を読み取るための「対比」「類比」「因果」という概念が重要になると考

えています。

その点で注意が必要なのは古文や漢文です。古文や漢文の単語は意味を丸暗記しがちですが、文脈によって意味が変わる単語があり、1つの意味を覚えただけでは誤読をしてしまう恐れがあります。そのため、単語の一義的な暗記にとどまらず、文脈の中で意味を捉えるよう指導しています。

「対比」「類比」「因果」で文学的な文章を論理的に読む

国語は文章をたくさん読んで感覚をつかむ教科と思われがちで、特に文学的な文章は感覚で読む生徒が少なくありません。しかし、3つの概念を身につければ、文学的な文章も論理的に読解することができます。

例えば、登場人物の心情は態度や行動に表れます。「心情―行動」という「因果」で文章を捉えれば、登場人物の心情の変化やその理由、行動を論理的に読み取れるのです。そして、「因果」といった概念を自分の身体の一部のようなものにするのであれば、文学的な文章を素材とする読解問題でも、傍線部直前に書かれた心情や行動に焦点をあてた選択肢と、素材文全体にわたって描かれている登場人物の背景な

どを押さえた選択肢のうち、適切な方を根拠を持って選ぶことができるのです。

文章を読み、書く過程で都度説明し、3つの概念を意識させる

授業では、「対比」「類比」「因果」自体を学習目標にすることはありません。3つの概念は文章を論理的に捉えるために使うものです。それらを自在に使えるようになるために、授業では、文章を読解したり書いたりする過程で、「対比」「類比」「因果」がどう使われているのかを生徒と一緒に確認し

ています。

例えば、「筆者の主張をつかむ」という課題では、私と生徒が対話をしながら、「対比」「類比」「因果」が使われている部分を一緒に探します。文章を要約する課題では、文章の中から「対比」「類比」「因果」を見いだせば、何を書くべきで、何を書かなくてよいかを判断できます。段落間の共通点を考えさせたり、原因と結果を示す文がないかを探させたりするなど、生徒が文章を構造的に捉えられるような問いかけをしています。

中核的な概念が身につく授業

「対比」「類比」「因果」の概念を自在に使えるようにするために「書く」

「書くこと」は読解力の向上にもつながる

「対比」「類比」「因果」といった概念を生徒が自在に使えるようにするためには、「書くこと」が鍵になると考えています。生徒が「対比」「類比」「因果」

果」の概念を使って自分で文章を書くことを繰り返すうちに、文章を読む際にも3つの概念を自然と意識するようになるからです。そうして読解力が高まれば、それがまた書くことにも生かされていきます。そのようなサイクルで読解力を高められるように授業を

設計しています。

読解力の向上のために書くことを重視しているのは、小論文の演習に多く取り組んだ生徒は総じて国語の読解力が上がったという私自身の経験に基づきます。さらに、学習指導要領の国語の各科目に、「書くこと」「読むこと」の基本の配当時間が記され、「読むこと」に偏らない方針が示されたことも踏まえています。以前の私は読解の指導に力を入れていましたが、今は書く活動にも力を入れていきます。

「伝わらない意見文」の問題点を話し合う

「論理国語」の単元「論理的に読む・書く」で接続表現をテーマにした授業を例に、授業の具体的な進め方を紹介します（図2）。

まず、空所補充問題などで接続表現の基礎事項を学び、次に、学んだ接続表現がどう使われているのかを確認しながら評論の読解をしました。その際、原因と結果、結果と原因にあたる箇所に線を引かせ、生徒が「因果」を意識できるようにしました。

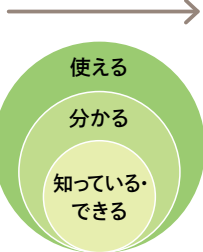
そうして、生徒を接続表現の使い方が何となくでも分かった状態にしてから、接続表現を用いて自分の意見を

図2 「論理国語」 接続表現を学ぶ授業の展開例

●単元の流れ

1 接続表現に関するプリント学習

知識・技能
知っている・できる



2 評論の読解「読むこと」

知識・技能
半分かり

4 解答例の問題点をグループで議論「話すこと・聞くこと」

思考・判断・表現
使える

3 160字の意見文の作成「書くこと」

思考・判断・表現
分かる

●例示する接続表現

	接続詞	用法
順接	したがって、ゆえに、だから	原因→結果・結論
逆接	しかし、だが、ところが	A、しかしB
理由	なぜなら	結果・結論→原因
条件	AならばB	Aという条件を仮定するとBが成り立つ
対比	一方、それに対し	A⇔B 対等に比べる
付加	A、またB	同列の事柄を列挙
換言	つまり、すなわち	前の説明を短く言い換える
例示	例えば	具体例を挙げて説明する

●生徒の振り返り

この活動をする前は文章がうまく書けず、自分が何を伝えたいかもよく分かっていなかった。しかし、接続表現を使うことで一文一文が書きやすくなり、自分の意見もまとまりやすくなった。小説やニュースなども、接続表現を意識して読むようになった。

160字の意見文を書いて、これまで自分が周りの人にしてきた説明は筋道が通っていない、分かりにくいものだったことに気づいた。これからは主張と理由を明確にして、分かりやすく伝えていきたい。

活動を通じて学んだことを意識して友だちなどと話すようにしたところ、以前に比べて自分の伝えたいことが明確に相手に伝わっていると感じている。自分が成長できる、よい授業を受けたのだと思った。

●授業の進め方

1 接続表現に関するプリント学習

接続詞の種類・用法を例示した上で、短い例文の空所補充問題に取り組み、基本事項の理解度を確認。

2 評論の読解

1,000字程度の評論を題材として、①で学んだ接続詞や接続を示す言い回しの箇所に印をつけながら読み、論の展開をつかむ。例えば、順接の接続詞を使って因果を表現していることなどを学ぶ。

3 160字の意見文の作成

「ニュースピックアップ」(*1)の記事を読み、R 80(*2)の手法を使って自分の意見をまとめる。1文40字程度×4文=160字を目安とし、2文目以降は最初に接続詞を用いる。その説明の際、「相手に論理的に伝えよう」という意識を持ち、型にのっとり考え、書く」という心構えについて、生徒に伝える。

1. 「意見」とその「論拠」を80字程度で書く。

意見 ……について、私は……。

論拠 なぜなら、……だからだ。

2. 予想される反論=「課題」とその「解決策」を80字程度で書く。

課題 しかし、……点が課題である。

解決策 したがって、……が必要だと考える。

3. 1と2を合体させて160字の意見文を完成させる。

4 解答例の問題点をグループで議論

提出された生徒の意見文を基に作成した「よくある伝わらない意見文」を生徒に提示。グループで、なぜ伝わらないのかを話し合う。生徒から上がった意見を整理して、「なぜなら（主張の理由の説明）」「しかし（予想される反論の課題）」「したがって（その課題への対策の言及）」の働きについて、主張と論拠、原因と結果という因果を示すことをまとめとして説明する。

●意見文のテーマ例

- 青切符による自転車の取り締まり
- 公園を全面禁煙にすること
- ドローンでの下校時の見守り
- 改正食品衛生法によって漬物の製造が許可制になること

※学校資料を基に編集部で作成。

*1 ベネッセが提供する進路・探究・表現学習ができるデジタル教材「キャリアナビ」内で、毎月配信される最新のニュース記事。 *2 中島博司元茨城県立並木中等教育学校校長が考案した、自分の考えを80字で論理的に書けるようになるメソッド。「R」は、リフレクション（振り返り）とリストラクチャー（再構築）のこと。

1600字で書く活動に取り組みました。その際、1文40字程度を目安とした4文構成とし、接続詞を必ず使うことを条件にしました。また、生徒が見通しを持って活動できるように、接続詞を使った文章の定型文を例示しました。

その後、生徒が提出した意見文を基に私が作成した「よくある伝わらない意見文」を提示し、なぜその意見文では伝わらないのかをグループで話し合わせました。生徒からは、「なぜなら」で始まっているが、「からです」で終わっていない』『許可制にする』から『地元の食文化が衰退していく』という課題が生じるという理屈がよく分からない」といった意見が上がりました。最後に私が生徒の意見を整理して、「なぜなら（主張の理由の説明）」「しかし（予想される反論の課題）」「したがって（その課題への対策の言及）」は、意見と論拠、原因と結果という「因果」を示す働きがあると説明しましたが、生徒は話し合いを通じてどうすれば因果を示せるかを自分で気づいたことで、因果の概念が身体化されていました。

書くことはその後の授業でも続け、文字数は2000字、4000字、6000字と徐々に増やしています。そのように、読んで、書いて、振り返るといったサイクルを生徒が何度も回すことで、学習

内容が「知っている・できる」から「分かる」「使える」へとレベルアップするような授業を設計しています。

生徒と一緒に隠喩を解釈し、物語の論理性を捉えさせる

次に、文学的な文章を題材とした授業の進め方について、『羅生門』を紹介し、

『羅生門』は、「類比」の1つである隠喩が多用されている物語です。物語の冒頭には、「所々丹塗にぬりの剥げた、大きな円柱に、蟋蟀せむしが一匹とまっている」とあり、途中に、「丹塗の柱にとまっていた蟋蟀も、もつどこかへ行つてしまった」と書かれています。そこで私は、「なぜ蟋蟀がとまっている」ではなく、「蟋蟀が一匹とまっている」なのかな」「下人は1人だから、それに関係があるかも」などと生徒と対話をして、蟋蟀が下人の隠喩であることに気づかせました。

そうして作者が巧みに隠喩を用いた物語であることを生徒に理解させた上で、ほかにもある隠喩の箇所を探させると、生徒は、門や季節などに着目してそれぞれ隠喩を見つけていきました。文学的な文章も論理的に読めることを生徒は実感したと思います。

文法の重要性を理解するから、覚える

「対比」「類比」「因果」を読み取り、また、表現する上でも必要となる知識が文法です。例えば、「しかし」や「だが」が逆接の接続詞であると知っていれば、それでつないでいる2つの文から「対比」を読み取れます。「まるで」が比喩を表す副詞であると理解していれば、「類比」を表現したい時に用いることができます。

古文や漢文では、文法や句法が「対比」「類比」「因果」を読み取る手がかりになることを実感させることで、生徒が文法や句法の重要性を理解できるようにしています。例えば古文では、助動詞の用法についての例文を通じて、『ぬ』が終止形の場合は完了の意味になり、連体形の場合は打ち消しの

意味になる」などと、活用形によって意味が異なることを示します。そうして生徒は、正確に文法を覚えなければ文章を誤読してしまう可能性があることを実感し、活用形を覚えることの重要性を真に理解するのです。

漢文では、「対比」を用いて自分の主張に説得力を持たせたり、故事を「類比」として引き合いに出したりする表現がよく見られます。そこで使われる言い回しを見極め、構文として捉えられるようにしています。その過程で生徒は、古来の中国人のものの伝え方や見方もつかんでいきます。

文章の種類によって濃淡はありますが、文章は「対比」「類比」「因果」の組み合わせで構成されています。生徒がそれを看破し、国語の悟りを開けるような授業をこれからも目指していきたいと思っています。

今後の展望

国語における中核的な概念は、文章を構造的・論理的に捉える際に使われるものだと考えています。3つの概念を授業で繰り返し使うことで、生徒は自分の読解力や表現力をメタ認知することができ、自分に何が足りないか、どんな力をつければよいか、学習の見通しを持って学ぶことができるようになると思っています。読解力や表現力を育む国語は他教科の学習にも影響する教科であることを意識して、これからも授業づくりをしていきます。

